

合戦図―描かれた〈武〉 勉誠出版 2022年12月B5版 416ページ 17600円
抜き刷り「小牧長久手合戦図屏風と戦国軍記」松浦由起著 36ページを読んで

令和4年2月13日 高橋和生

目次

- 第一章 私が抱いた二つの問題
- 第二章 読み切りました。結論はあえて見づらく書かれていました。何で？
- 第三章 ご先祖様は偉かったんだゾ。と、〈武〉を思い出するための合戦図屏風
- 第四章 屏風とは何か？
- 第五章 洛中洛外図屏風から、合戦図屏風へ
- 第六章 文系学者への建築家からの期待
- 第七章 天の啓示を生かす努力が研究となる。発表が難しい。

第一章 私が抱いた二つの問題

送り状には「お暇な折にでもお読みください」とありますが、続いて「後世に残る研究とも評価していただき」と自信を込めているので、これは早速読破し、著者には読書感想文を送らないといけないと思いました。私は、私のいつもの本の読み方にしたがい、「はじめに」から5ページほどの前段、研究の目的を読んでから、「おわりに」を読み、参考文献に目を通したのです。そして、ほんの30分ほどで、頭はグルグルになり先に読み進めませんでした。

「合戦記を物語として読むだけに飽き足らず、主要場면을視覚化するために屏風絵にした」に、あれ？でした。屏風絵は襖絵に囲まれた武士の住まいの中で、更に場を形成するための「しつらい」として用意されるものであり、その「絵のテーマになぜ小牧長久手合戦図が選ばれたか」が本題であると思いついていたのですが、そうではないのだと気づいたしだいです。犬山城に長篠合戦図屏風があると知っていても、それと一対で小牧長久手合戦図がある事すら知らなかった私です。冒頭に白水正氏、岡本良一氏の長い見解が引き出されていて、「長く読みにくいな、参考文献で良いのに。」と感じていた私はこの「屏風は合戦記の主要場면을視覚化」のところで、私が全く素人そのものである事を自覚しました。私は合戦記を読んだことがありません。

「小牧陣長久手軍始末記を紹介したい。」の論考の内容は、古文書の始末記を翻案したものでしょうから「こりや、手に負えないぞ。」でした。名古屋城天守木造化反対運動の中で桶狭間の戦いの新説を唱える水野誠志朗氏と知り合い、桶狭間を歩いたのですが、義元が何処で討ち死にしたなど、私にはどうでも良い事であり「信長公記」の人の名を中心とした記録だけで合戦の歴史はよいではないかと思っています。

「おわりに」の「軍学者の語る合戦譚と、古地図とによって、屏風は描かれたのではないかと考える。」にも、あれ？でした。名所図会は19世紀のものであり、西洋から透視図法が入って来たあとのものです。それ以前の田舎の古地図となると、城下町図（洛中洛外図屏風も含む）とは違い、山と川だけのトポジカルな表現なものであり、村ごとの田んぼの面積〓収穫量がわかればよいものでした。歴史地理の愛好家の森幸安（1701〜没年不詳）が自筆の地図を作製してから、それまでの名勝旧跡案内であった浮世

絵に代わって観光地・京都の地図が売られるようになったのでした。江戸百景など浮世絵のデフォルメは楽しいのですが、江戸案内には切り絵図が必要です。尾張藩では儒学者の細井平洲が校長となり1783年に明倫堂（我が母校・明和の元祖）を開き、藩士の子弟だけでなく、農民や町人にも儒学、国学を教えた頃、18世紀後半になってようやく、地誌の表現としての古地図が生れたのであり、17世紀中ごろ制作された「小牧長久手合戦図屏風」ではまだ古地図が無いはずだ、と思っていたのでした。所収の「長久手図」は、いつ頃の長久手の姿を現しているのか、その記述は論考にありません。稲葉通邦が「参考長久手記」をまとめた頃と、ほぼ一致しているのではないのでしょうか。

この二つの問題を抱えて、次に参考文献のタイトルを読むのですがどの本も私は読んでいません。唯一、都市史学徒を自認する私に感心を持つ洛中洛外図関連があり、著者も「洛中洛外図に関する一連の著作には教えられる事が多くあった。」と書いていますので、著者が何を教えられたかはともかく、私の知識でもって何かを書ければ、最初の問題「屏風は合戦記の主要場面を視覚化」への答えになるうかと、抜き刷りを手離して、自身で書いたものを読み返しました。

90年に京都で洛中洛外図上杉本が、舟木本と池田本とセット見れると聞き、東京からわざわざ出かけて以来、上杉本にはまっています。半世紀前、大学の恩師・内藤昌先生は安土城天守の「復元的研究」をしながら、「ローマ教皇に贈られた安土山屏風が見つかれば、私の研究の評価が定まる。」と常々言っておられました。私は復元の下働きをしつつ、研究対象は城下町でしたので、どうしても上杉本の実物が見たかったのです。

2007年には、狩野永徳展が京都で開かれ、洛中洛外図だけでなく、日本画の歴史の概略と狩野派の全体像をつかむことが出来ました。そのころ、私はアメリカでトヨタの設計をしており、現地でのプリゼでは、自身のデザインのバックにはこんな伝統文化があるのだと、芸術新潮を10冊買い求め、アメリカ人に配っています。

2013年には、凄い事に、上杉本、舟木本、歴博甲本、歴博乙本、福岡市博本、勝興寺本、池田本が京都に並び、2回も行きました。一度に並べてくれなかったのです。

合戦図屏風には興味ないと書きましたが、長篠合戦図屏風は見ています。半世紀前に大阪城天守閣本。そして、一昨年でしたか、徳川美術館で徳川美術館本ともう一本です。しかし、私に見えているのは長篠城であり、内藤先生が望楼型天守の祖形として大阪城本を「城の日本史」に載せているのでそれとの比較で見えています。犬山城本が17世紀の祖本であり、大坂城本は18世紀の写本なのですが、色が綺麗に残っていたのからか、犬山城本は写真掲載の許可が得られなかったのか、大坂城天守閣本掲載の理由は今となってはわかりません。祖本といえども、100年後に「こうであったらう。」の絵ですので描法の差は気にしませんでした。秀吉、信長の姿はおまけであり、この屏風は、三河武士の活躍を旗指物で示すことが主眼であると私は理解しています。

大阪夏の陣図屏風は上田市の安楽寺で、150センチ×360センチの画面二枚に人物5071人、馬348頭、幟1387本が描かれている写本をジックリ見えています。金雲の中の幟で武家の名とその陣形を示しているのですが、そのバランスが悪く、人物の動き、描き分け、馬の姿がよろしくなく、淀川を逃げる女、襲う輩と下劣であり、



伝承にある17世紀初にこの合戦に参加した黒田長政が命じて作成したというのではないと感じました。作成年代はずっと下がると思います。

このような昔のことを思い出しながら、抜き刷りの最後のページの合戦図の図録をボンヤリと見ていて、これが実は本の目次であることに気づきました。慌てて「合戦図―描かれた〈武〉」をネットで探すと、「中世から近世における主要な合戦図38作品をフルカラーで紹介。さらに、美術・文学・歴史などの観点より、中世から近世への過渡期となる十七世紀の政治的・文化的諸状況を踏まえつつ、「文化としての〈武〉」という観点から合戦図の展開を解き明かす、多数の図版を盛り込んだ12本の論考を収載。これ一冊で「合戦図」をめぐる研究の最先端を知ることができる決定版。」とあります。

図録がメインの17600円もする豪華本とあれば、合戦の好事家向けであり、これは、合戦記素人の私の力の及ぶことにはないかと思いつつも、論考の表題に目を移すと、「合戦図の絵画表現と深化」とはありますが、屏風とは単に「大画面」でしかなく、「しつらい」としての屏風の考察から、洛中洛外図屏風と比較しての「合戦図」屏風の論考が無い事にも気づきました。また、大坂城夏の陣図屏風への論考はなく、賤ヶ岳合戦図屏風は「太閤記」とあり、長篠合戦図屏風は「甲陽軍艦」「甫庵信長記」の軍記にも基づいて論考は展開されているでしょう。この読書感想文の為に本を買ってこれらを読むうとまでは思いません。この感想文を送れば著者がみせてくれるでしょう。(笑)

私の抱いた問題点「屏風は合戦記の主要場面を視覚化」は、この本全体の論考の主要テーマだったと気づきました。それを問題点だと思って読書感想文を書くのでは、まったく天に唾するようなものです。抜き刷りが届いた日は、ここまでで思考を止め、3日間は抜き刷りを机の隅においてしまいました。

第二章 読み切りました。結論はあえて見づらく書かれていました。何で？

パラパラとめくり、「小牧陣始末記」の「古色」な漢文を「雅訓」な書き下し分にしたと並ぶ、カタカナ混じりの漢字を目で追うもサッパリ頭に入りません。長篠での火縄銃の三段打ちは日本軍の創作だと聞きますので、読みやすくするように軍人が頑張ったのでしようが、私は読めてはいても読んで理解している感覚を持ってません。困ったな、と行きつ戻りつしていたところ、添付された古文書の写真に突然鼻がむずきました。半世紀前の内藤研究室暗室の臭いを思い出したのです。マイクロフィルムからシーエッチ(薄い感光紙)に古文書を焼き付ける作業を一日中やらされていたのです。

著者が白水氏に問い合わせ「或家蔵長久手合戦画図」付け紙之写1823年文政6年」の撮影を自身で行ったとありますが、どこにあるのでしょうか。「本稿末尾」とは参考文献の後ろでした。私のいつもの本の読み方ですとここは読みません。屏風への説明として札が張られているのはよくありますが、はがれやすいものなので制作初期の控えがあれば、これはまさに「はじめに」に著者が書かれた「絵の注文者、絵師、鑑賞者が共有した絵解き物語」そのものです。これが、この論考の結論でしょう。屏風の写真と共に、このB5版4枚が併記してあれば、「小牧長久手合戦図屏風と戦国軍記」そのものとなり

ます。これは簡単に読めます。張り紙ですので、文が短く、改行が多いからです。

それから、私は抜き刷りに居住まいをただし、「合戦記を物語として読むだけに飽き足らず、主要場面を視覚化するために屏風絵にした」「長久手合戦のエピソード集であり、物語絵の屏風版という趣」の結論探しを、著者の筆のままに追いました。研究者としては、「或家蔵長久手合戦画面図付け紙之写」の原本である軍記を探し出さないといけません。

白水正氏の「長久手合戦屏風の人名表記について2016年」から、著者は古文書の山に分け入り、「屏風絵のエピソードが史実かどうかは問題ではない」と歴史学を脇において、次々と展開していく姿は探検モノを読んでいるようで楽しくなりました。なに、読めない漢字は読まなくてもよいのです。「小牧陣始末記」と、書き下した明治の軍人は、小牧長久手合戦図屏風にある人名とエピソードが全て「小牧陣始末記」と一致する事は当然わかっていたでしょう。しかし、同じ「小牧陣始末記」であるのに、愛知県図書館の著者は「宇都宮三郎、神谷存心」であり、名古屋市図書館の著者は「神谷直正(述)、曾我祐準(編)」と違っていました。この「編」の軍人・従三位子爵・曾我祐準が明治22年10月1日に書いた「序文」が決定的でした。著者はその裏をとり、書き下された原本「小牧陣長久手軍始末記」の写本を名古屋市鶴舞中央図書館で探し出します。序文・はじめに、は古来、書きものには大変重要なところなのでした。めでたし、めでたし。

論文の「まとめ」は、論文の最後のページに「まとめ」とは題さず、ありました。

「尾張藩の書物奉行で蔵書家であった河村秀頼(1718～1783)によって残された「小牧陣長久手軍始末記」は、甲州流軍学者神谷存心(1646～1729)によって語られたものである。存心は、第4代犬山藩当主、成瀬隼人正の同心であったことから、その口述によって、犬山城白帝文庫蔵「長久手合戦図屏風」は制作されたものと考えられる。またそれは(存心が江戸から名古屋に来た)宝永元年から(亡くなる)享保14年にかけて(1704～1729)のことであろう。」

私は、著者が「現状では、祖本とされる屏風が見つかっていないので、成瀬家のものを諸本の原本と考えて考察する。」と書いており、当然17世紀の中ごろの制作だと思っていたのですが、「まとめ」では、18世紀に入っていた事になります。著者の「口語を漢文体に書き留めるといいうのは現代の我々には想像しにくい」のは全く同感です。「信長公記」は、太田牛一の日記から始まっていますが、江戸時代になると「太閤記」と同様に軍記物の様相をまとい、牛一は招かれて「信長公記」を語る事をしています。当然、漢文ではありません。木版本が流布するまでは、やはり「語り」が主体であったのでしょうか。儒学者・小瀬甫庵は書く力は当然あるのですが、神谷存心が、お調子者の御畳奉行・朝日文左衛門を弟子に持つほどの軍学者であったのに、弓衆の太田牛一程の筆力を持つていなかったとは不自然です。江戸時代は「小牧陣長久手軍始末記」が伏されたとあり、マル秘とするために「口伝」としたのでしょうか。とすると、屏風を前にして、著者の「絵の注文者、絵師、鑑賞者が共有した絵解き物語」とは、タイトルにある戦国軍記ではなく、「長久手合戦画面図付け紙之写」ぐらいが適当であると思う次第です。

私は「絵のテーマになぜ小牧長久手合戦図が選ばれたか」が論文のテーマではないかと書きましたが、「まとめ」の中に、「成瀬隼人正の発意で成瀬子吉を主役として」を入れれば、その答えとなります。武家の「しつらい」として、祖先の偉業をわかりやすく絵解きした「長篠合戦図屏風」が先にあり、「小牧長久手合戦図屏風」を一对になるように第4代犬山藩当主、成瀬隼人正が、付け加えたのでしょうか。

「長篠合戦図屏風」は三河武士に人気であり、全国に17本もあるようで、「合戦図―描かれた〈武〉」の論考も2本あります。あと、関ヶ原合戦図屏風（大阪、岐阜）も好事家に人気ですが、今回論考はありませんでした。著者は関ヶ原合戦についての論文も書いており、著者には、小牧長久手合戦屏風が18世紀初頭に書かれていた事を出発点として、この地域にある合戦図屏風3本をまとめて、歴史学に立ち位置を置き、屏風紹介を初学者向けに書きおろしていただけることを期待しています。大坂夏の陣は圧倒的に徳川方の武力が強かったので、この屏風の制作意図は長篠・小牧長久手・関ヶ原の合戦図屏風3本とは全く違うと思います。この屏風は重要文化財であっても外した方が「戦国合戦図屏風」としてまとまると思います。

以降のこの読書感想文の章は、著者・編集者に、私が大いなる期待を込めて書くものです。「お節介」とも言います。新しい本を編むに参考になれば幸いです。

第三章 ご先祖様は偉かったんだゾ。と、〈武〉を思い出すための合戦図屏風

著者の「合戦記を物語として読むだけに飽き足らず、主要場面を視覚化するために屏風絵にした」のではなく、ビジュアル一発で「ご先祖様は偉かったゾ」とわかる屏風が「しつらい」されたというのが私の考えです。屏風に近づいてジッと見れば、洛中洛外図のごとく、さらに楽しくなるものを発注者は絵師に求めたのでした。

絵の詳細を書くには合戦記として物語化されたシナリオがないといけません。長篠の戦いは1575年、小牧・長久手の戦いは1584年、関ヶ原の戦いは1600年です。古い方が物語化される時間がありますが、戦いの大きさ、意義からみると、物語化の順番は逆になります。関ヶ原の戦いは絵巻物も作られています。兵法を用いての戦闘での具体例は「口伝」とされていたのが、武士であるならば「兵学」が重要であるとなり、〈武〉を求める武士に教えるようになるのは18世紀です。人殺しを専業とした武士も100年もたてば、あの朝日文左衛門のように、サラリーマン化し〈武〉を忘れてしまい、兵学と合戦の物語化が一致した軍記が必要とされたのだと思います。

私の考える、思い出す〈武〉の証拠だては間接的になります。

「兵学」の流派で著名なのは、武田信玄を祖とする「甲州流」です。長篠・小牧長久手の物語化は、いずれも「甲州流」の軍学者によって行われ、合戦図屏風のシナリオとなりました。武田の兵がそのまま徳川、井伊の下に入ったことが大きく、春日聡次郎が完

成させた「甲陽軍鑑」は、徳川方として大坂夏の陣で活躍した小幡勘兵景憲（1572年生まれ）が、「甲陽軍鑑末書前集・同後集」と発展させ、広島、尾張で普及しました。

この小幡に1621年13歳で入門した北条氏長が、「兵法雄鑑」「土軍鑑」表し、「北条流」を起こし幕府に採用されます。甲州流の中世部分を取り去り、神道の思想の基にオランダの測量術、砲術を取り入れました。それに、儒教的哲学と日本的史学を加えて「兵学」としてまとめたのが山鹿素行（1622〜1685）であり「山鹿流」として、赤穂、平戸、水戸、津、松江、熊本にも伝えられました。山鹿流に中国の兵法を合わせ体系化したのが長沼澹斎（1635年生まれ）の「長沼流」です。武田信玄と言えばそれに対抗したのが上杉謙信であり、「越後流」を起こしています。

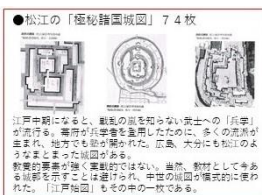
「江戸始図」を発見したと、徳川美術館で原史彦学芸員プロデュースの元、2016年8月6日に奈良大学の千田氏が講演した絵図は、松江城「極秘諸国城図」の74枚の中に「今江戸図」とセットであったものであり、このようなまとまった城図は、他に広島、大分にもある事が知られています。正保の絵図は「極秘」なはずなのですが、18世紀になると、地方であっても城の縄張りを記号化したネタを基に「兵学」が講じられていたのです。もちろん、もはや机上の空論となっています。

また、後でかきますが、江戸始図は1979年NHK出版「城の日本史」で内藤先生が言及しており、「兵学」研究者には良く知られた物でした。千田氏が発見したものではありません。徳川美術館は民間の美術館ですので客集めがあるのでしようが、この絵図の景観考証を行ったという原史彦学芸員になんとも胡散臭い感じを抱いています。脱線しましたが、前に書いた「兵学」の私の元ネタは「城の日本史」からです。

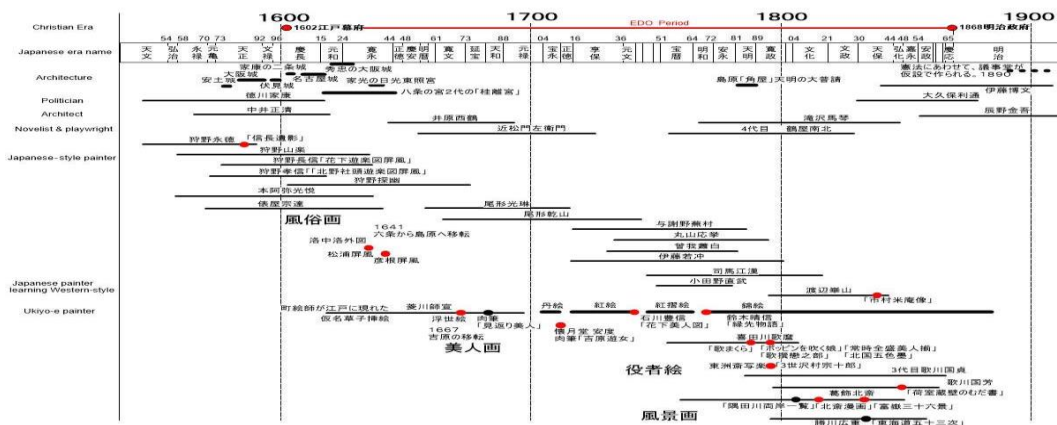
「ご先祖様は偉かったんだゾ。」と、17世紀の中ごろになると、多くの書物が極秘裏に書かれ子孫に伝える事が行われます。石垣・穴太衆の後藤家「文禄年中以来等之旧記」は、安土城復元にあたって同級生が現代語に訳しました。鉄砲・国友は「国友鉄砲記」で、信長の為に鉄砲を作ったとウソを書いています。国友村の鉄砲は関ヶ原の戦いからだとというのが今の定説です。大工が「愚子見記」「四天王流・匠明」「建仁寺流家伝書」と木割書を表し、それぞれの流派を広げはじめのもこのころからです。これらは内藤昌の名前と併用してネット検索とすると簡単にヒットします。内容は略します。技術畑での17世紀の情報が拡大していく状況を先に書きましたが、庶民向けの「絵本太閤記1797年」へ向かう文芸の進展も徐々にあります。著者の「武功夜話研究」を私は読んでいないのですが、いつできたのかとなると、タイトルが「夜に話す」のですからアラビアンナイトと同じで、18世紀以降の合戦図屏風絵と同時代のものであり、文字で「武」を思い出し、楽しみたい人たちの物だと思います。

寛永に江戸武家文化の華が開いたと言われますが、この頃に京都は人口40万人と最大の規模となっています。全国に150もの城下町が

徳川美術館の原史彦先生



●松江の「極秘諸国城図」74枚
江戸中期になると、戦前の知を知らない武士への「兵学」が流行る。幕府が兵学書を重用したために、多くの武家が生まれ、地方でも広がった。広島、大分にも松江のようになるといった城図がある。教育的要素が強くない。当然、教材として寺ある城図を示すことは避けられ、中世の城図が模範的に使われた。「江戸始図」もその中の一図である。



一斉に立ち上がったので、都への地方（江戸も含む）の期待は大きかったのだと思います。長谷川等伯、本阿弥光悦、俵屋宗達、尾形光琳だけでなく、狩野派も全国に出向き、武家屋敷の襖絵を書き、京都の工房では、洛中洛外図屏風、合戦図屏風、彦根図屏風のような風俗画面屏風の制作で大忙しだったことでしょう。「工芸都市」京都は多くの人を集めます。元禄（1688〜1704/5代将軍徳川綱吉）の頃には関西の中心を「商い」の大阪に譲り、大阪の人口が40万人となり京都は20万人と減らします。以上、小牧長久手合戦図屏風が描かれた18世紀初頭の社会状況を書き、私の考える、思い出す〈武〉の間接的な証拠としました。

「ご先祖様は偉かったんだゾ。」となれば、著者の絵巻物の例示は「一遍上人絵伝1299年」でなく、「蒙古襲来絵詞1293年」でしょう。竹崎季長は、九州から鎌倉幕府まで出かけて「俺は文永の役で一番駆けをしたんだ。偉いんだぞ。」を認めさせ報償を得た話に、地頭となって弘安の役を戦う話をさらに加え、末尾には家訓まで入れていきます。

合戦図―描かれた〈武〉が本のタイトルなのに、おかしいゾと思いつつ読み進むと、名のある武将、池田勝入父子、森長可、木下勘解の討死がクローズアップされて描かれており、徳川方で目立つのは赤備えの井伊万千代の一番槍のようです。ようです、とは白帝文庫のホームページのぼやけた絵でしかこの屏風絵が見られていないので、「或家蔵」長久手合戦画面図「付け紙之写」から見当をつけているのですが、17歳の成瀬小吉が組打ちにて勝利を得、馬乗りになった小吉が脇差を抜いて今まさに首を取ろうとする場面と言われても、これかな？です。徳川美術館蔵の小牧長久手合戦図屏風（井伊家蔵？）では小吉の活躍は消されていると著者が書いているので、徳川美術館のホームページにある鮮明な画像を拾い、PC上で二つの屏風を並べてみました。徳川美術館では、井伊が組打ちしている解説がありました。（笑）

昔はこのように屏風が並べられることはありませんので、「ご先祖様は偉かったんだゾ。」と家々で言える類本が多く作られたのでしよう。以上、詞で説明しない限り「ご先祖様は偉かったんだゾ。」がわからない、合戦図屏風としてのまとまり良さをPC上で確認しました。面白いのは小牧長久手より舞台装置が多い長篠ですが。

「成瀬子吉の活躍を描く」と言っても、小吉が大将首を取ったわけでもないのです、このような表現になったのでしょうか。竹崎季長のようにヒーローとして表現をする「絵巻物の屏風版」でなく、合戦図屏風としてある事をまず優先した成瀬隼人正であり絵師であったので、著者は絵巻物の例示をあえて登場人物が群として描かれている「一遍上人絵伝」にしたのだと、一人合点しました。

画面に近づき目を凝らすと主役が見えるというのは、狩野永徳が23歳の時に描いた「洛中洛外図 上杉本1565年」にもあります。この絵を注文した足利義輝が子供時代過ごした二条斯波家の家の前に、永徳は鬪鶏を見ている少年（義輝）をおきました。

「ご先祖様は偉かったんだゾ。」の最後は、名古屋博物館蔵「築造屏風図」です。内藤先生は、慶長12年（1607）の徳川家康による第一期の駿府城の復元をしており、



この小屏風を、前田利長がお手伝い普請に来ていた頃と特定しています。右端には、前田家の丁場・二の丸南西大手舁形門が描かれ、左端には、白地に赤丸の本田家、三巴の篠原家と、前田家の家臣の家紋が描かれています。利長は大藩の前田家を幕府から守るために鼻毛を延ばしてうつけをよそおったと伝えられるほどですので前田家の家紋である梅鉢は桜に変えて右下の宴会の引幕としています。大石の後ろで白馬にまたがった武士がこの屏風ではひときわ目立っています。私は彼が注文者だと推定しています。

第四章 屏風とは何か？

「しつらい」と、カッコつきのひらがなで書きましたが、漢字ですと「室礼」「鋪設」と当て字をしています。

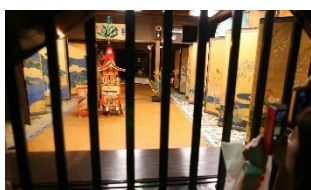
祇園祭宵山の楽しみの一つに、町屋がそれぞれ伝来のお宝である屏風を通りに向けて並べたのを格子越しに覗くのがあります。格子は、通りからは中が見えなく、中から通りが良く見える町屋の工夫なのですが、宵山の夜だけは空間が逆転します。灯りに照らされ屏風がそれぞれに「ミテミテ」とあるのですが、金屏風が何と言っても主役です。その格別なショーアップに、皆さん「へー、おきばりやしたナ。」と歓声を上げて楽しみます。屏風は調度品の一つというだけでなく、晴れの場の装飾という意味合いが昔からありました。日本の伝統空間は、床・壁・天井ともに平板であり、家具調度品を季節ごとに押し入れから出し入れして、四季を楽しんで生活するのです。

西洋のインテリアは、壁・天井に装飾がまわり、家具調度の配置も固定化されます。従って、建築家は FFE のデザインもしないとインテリアとなりません。日本から屏風を輸入してインテリアデザインの主役にされている方もいます。Furniture (家具) というより Fixture (取り外しが可能な装備) です。尚、E とは Equipment (備品) です。

源氏物語には「しつらい」と共に「障子」という言葉も出てきます。蔀戸と板壁に囲われた寢殿づくりは、塗籠られた寢室以外はガランドウであり、そこに置かれる几帳、衝立、屏風など「障…ふさぐ、さまたげる」ものを全て「障子」と呼んでいたようで、板、竹、布、紙と材料は様々でした。Furniture (家具) というより Fixture (取り外しが可能な装備) です。「障子」は漢語であり、「しつらい」は和語です。(小泉和子 2015)

割りやすい杉の一枚板があることはあるのですが、板は材木を割って得るものであり、厚くなりました。建具として、薄い板戸(遣戸、舞良戸)が出現するには、室町時代になって材木を正目に切り出せる大鋸(おが)が登場してからです。板材が安価に手に入るようになって、板に細かい細工が可能になりました。12世紀の源氏物語絵巻にも屏風が描かれています。揺れる几帳が女御の隠しになるのに対し、屏風は男性貴族の背にあって空間の位を示す装置に見えます。竹を骨にして紙を何枚も重ねたのでしょうか。

今見る晴れの場の装飾としての屏風の祖は、板敷の仏殿・寢殿にはなく、足利義政(1436~1490)の周りに五山の禅僧、公家、貴族化した武家・同朋衆が集まり、唐物の水墨画を貴び、香、立花をしつらえ、茶を楽しみ、連歌をなし、庭園で演じられる能を鑑賞するようになってからだと考えます。応仁の乱で京都は燃えつきるのですが、



そこに東山文化が咲きました。銀閣の庭を挟んである東求堂のように、板敷に畳が敷き詰められ、襖で部屋を間仕切るようになってから、目隠しも兼ねつつ、主客の背景として屏風が使われたのでしょうか。また、平板な空間で集りを開くにあたって、屏風は愛でる対象への空間の方向性の演出、焦点づくりの「しつらい」にもなります。

住宅に畳が敷き詰められるのは、管領・細川家などの権力者の主殿づくり、五山の方丈からであり、武家一般に畳割りの座敷が広まるのは江戸時代になってからだと思います。「工芸都市」京都には多くの金が入りました。町屋に屏風が飾られるのは、江戸中頃まで下がるのでしょうか。

第五章 洛中洛外図屏風から、合戦図屏風へ

洛中洛外図屏風は全国に70本あるそうですが、一番古いのは、狩野永徳の祖父である元信が細川の為に1530年頃に描いた歴博甲本（町田本）です。金泥でくすんでおり全体の色調も地味に感じます。しかし、永徳の早書きと違いしっかり書かれています。細川の殿様だけでなく、扇を制作中の元信自身の姿もチャッカリ元信は入れています。元信は漢画（水墨画）だけでなく、やまと絵も土佐派との婚姻で習得しました。扇の中に洛中を描いたと「春富宿禰記裏文書」にあり、戦国期の京土産の扇に華やかな細密画を描いていた元信が、大画面の屏風に洛中洛外図を初めて展開したのだと思います。

しかし、その書かれた建物は永徳の上杉本（1563年〜65年）とほぼ同じです。上杉本は、足利義輝（1536〜65）が「そうあって欲しい」都の姿を23歳の狩野永徳に描かせたのであり、義輝は田舎者の上杉に屏風を贈り、上杉の上洛を促したかったのではないのでしょうか。義輝が自刃して注文主を失った永徳の屏風は、1574年に信長（1568年入京）が上杉に贈る事で京の栄華を上杉に示す目的だけは成就しました。

威勢を示す権力者は義輝から信長に変わってしまいましたが、信長に「京はかくあらねばならない」と都の復興を決意させた絵でもあった事でしょう。信長は京都に自身の館を作らなかつたのですが、その考えは、「京はかくあらねばならない」の上杉本と同じように都の空間を捉えて、あえて、京都から一日の距離の安土に安土城下町を作ったのだと思います。内裏で華やかに開かれている正月節会、義政の「花の御所」、足利公方様より大きな屋敷の「細川殿」、信長が足利義昭の為に作る二条館の場所に建つ「斯波殿」いずれも当時は無かったり、荒れ果てたのでした。1565年、ルイスフロイスが京見物をした様子が「日本史」に書かれています。三好に敗れて廃屋となっていた細川殿の庭に入り、面影を残す日本庭園のデザインに感心しています。

洛中洛外図屏風は、煌びやかで持ち運びができるので姫のお輿入れ道具に良いと、数が残っています。二条城天守は1750年に燃えて無くなったのですが、秀忠と家光が待つ二条城に御水尾天皇が行列を仕立てて入る姿が、「そうあって欲しい」姿として、いつまでも描かれています。

民博所蔵の江戸図屏風には、徳川家光の姿が見えます。元和の江戸の姿を、京に負けな



い姿になっているゾと描き、公家に贈ったものです。「そうあって欲しい」は、「描かれた〈武〉」合戦図屏風にもひきつがれていきます。

生首がころがる合戦図屏風は姫の「しつらい」には適していませんし、実際に生首を刈った人たちが生きている間に、凄惨な合戦図屏風を描くことはありませんでした。殺りくに明け暮れた戦国大名は、華麗で豪放な安土桃山文化を作りました。永徳が襖を繋げて描いた巨大な老松の前に細密画の屏風は価値を持ちません。書院造りが完成すると、上段の間には、押し板の上に壮麗な障壁画が賑やかな棚と並んであり、書院と帳台構（塗籠が様式化したもの）が横につきます。

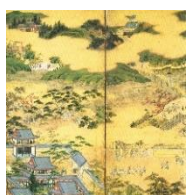
〈武〉を思いださせる合戦図屏風は武家の対面所には似合いません。

洛中洛外図屏風と合戦図屏風の間には、京の文化を地方に売る図屏風があります。背景に金銀箔を用い、大胆な構図、型紙のパターンを用いた繰り返し、花木・草花が多い琳派が有名ですが、その工房が興きる前に、松浦屏風、彦根屏風のような遊女を描いた風俗図屏風、狩野派が得意とした洛外遊興図屏風・祭礼図屏風があります。

名古屋博物館蔵の長篠合戦図屏風は、描き方から洛外遊興図の系統だと思えます。参考にする地図などありません。あっても絵師は参考にしません。また、〈武〉を思いだす必要が無い17世紀の合戦図屏風は、緑の山に金雲を流し、旗指物、大鎧、馬飾りを静的に描く、座敷飾りではなかったのではないのでしょうか。

書院造はハレとケにゾーニングされており、お殿様の居室は黒書院とよばれ、水墨画で道教・儒教の仙人・哲人が描かれていました。武家の晴れの場を作り出すには、小屏風は使い勝手が良かったのだと思います。

巨大な合戦図屏風「大坂夏の陣図屏風」となると、書院造りの南庭で人を集めて催しものを行う時、殿様の場を広間に作る為に、殿様の背に用いたのではないかと想像してきます。



第六章 文系学者への建築家からの期待

自らを建築家と位置づけ、学者でもないのに学者批判をするのは極めた不遜である事を承知して書いていきます。私は内藤研究室の在籍はわずか一年ですし、安土城の「復元的研究」においては下働きしかしていませんが、先生には仲人をしていただき、長くご厚情をたまわりました。研究を続けるために大学院に残った友人二人と、あの安土城復元の濃密な時間を共有しているのが私の誇りです。

著者の言葉をヒントに書き出しています。私の手前勝手な論をどんどん展開していくので適当に読み飛ばしてください。合戦マニア、城マニアを相手に私が苦戦している様子を笑いながら読んでいただけると幸いです。

― 目次 ―

批判の一 合戦図屏風の解説は、歴史学でなく、合戦記の文学・絵画の史学からか。

批判の二 考古学は妄想の学問でよいが、古文書があり遺構の残る時代ではダメ。

批判の三 フィジカルであれ、歴史地理学に期待する。

批判の四 学者の研究対象が、狭い範囲に限定されている事への批判。

批判の一 合戦図屏風の解説は、歴史学でなく、合戦記の文学・絵画の史学からか。

ネットでのこの本の紹介は「美術・文学・歴史などの観点より、中世から近世への過渡期となる十七世紀の政治的・文化的諸状況を踏まえつつ、「文化としての〈武〉」という観点から合戦図の展開を解き明かす。」とありますが、最新の研究成果とある12編の論考は「屏風は合戦記の主要場面を視覚化」がテーマだと受け取りました。著者は古文書から歴史の実相を研究する歴史学を脇に置いて、後世に残る論文を書き上げましたが、それは、絵画の史学の範疇でしょう。合戦記が屏風絵のシナリオとしてあるのですが、合戦記ははたして文学の範疇にあるものなのでしょうか。

本の編集は、説話文学と近世絵画を専門とする二人の学者が臨んでいるのですが、美術・文学の観点はあっても、歴史の観点が欠けているのではないかと不安になりました。中世の合戦絵巻は物語絵巻であり文学からアプローチする論考も可能でしょうに、本の目次の「合戦絵巻」の括りは物語を既に読み親しんでいる人を前提に合戦図を抜き出したように受け取れます。皮肉です。すいません、私は本の中身を見ないで書いています。物語であっても、合戦の様だけをビジュアル一発で楽しませる、そんな38のフルカラ―の図録が高額で買われる事に、購入者は説話を歴史事実と混同してしまうのではないか

薄田大輔(うすだ・だいすけ)
1985年生まれ。徳川美術館学芸員。
専門は日本近世絵画。

論文に「徳治頼家七代目狩野探信守道にみる江戸狩野派と風俗画」(『美術史』第173号、美術史学会、2012年10月)、「狩野典信にみる江戸狩野派の探幽学習―狩野典信筆『西湖図』を中心に」(『金鱗叢書』第44輯、2017年3月)、「第八章 静岡民間神社と日光東照宮をつないだ天井画―狩野栄信・寛信筆『天人図』(迦陵頻伽図)の図様を巡って」(静岡県富士山世界遺産センター、徳川記念財団編『徳川将軍と富士山』ことのは社、2019年5月)などがある。

編者略歴
中根千絵(なかね・ちえ)

1967年生まれ。愛知県立大学教授。博士(文学)。
専門は中古・中世文学、説話文学。

著書に『いくさの物語と語話の文学史』(三弥井書店、2010年)、『武家の文物と源氏物語絵―尾張徳川家伝来品を起点として』(共編著、翰林書房、2012年)、論文に「靈巖寺の妙見菩薩―日本の星宿神」(『天空の神話学』アジア遊学121、2009年)などがある。

と不安になりました。トヨタの社長は「売れるクルマが良いクルマ」と言いましたが、売れる本が良い本ではないでしょう。文系の学者に期待するところです。

私は名古屋城天守木造化事業の反対運動を7年やっています。そして、事業は止まっています。読売新聞の記者が取材に来て「新聞を読むのは老人ですので、城、合戦の記事は人気なんですよ。」と言うので、内藤先生の「江戸と江戸城1966年」「安土城の研究1976年」「ビジュアル版 城の日本史1995年」を持ち出して「城は都市」、「黒沢映画の〈乱〉で姫路城、熊本城が戦塵けむる原野に屹立している姿は歴史的事実に反して滑稽でさえある。」を指し示し、「今は、講談社学術文庫で安く再版されているので買って読んでください。」とやるのですが、「城は天守」と書かれ、「城は都市」は記事にはなりません。

私は、塩野七生の歴史小説が大好きで、ローマ人の物語・コンスタンチノーブルの陥落・アレキサンドロス大王の東征・十字軍物語と全て読んでいます。合戦シーンには毎回ワクワクします。三国志、太平記は吉川英治で読みました。時代の転換には戦争がつきものであり、読ませる合戦シーンがなくて歴史小説はなりたちません。しかし、合戦シーンだけを読んで面白いのでしょうか。著者の言う「合戦記を物語として読むだけに飽き足らず、主要場面を視覚化するために屏風絵にした」のではなく、合戦記を読まずとも、「しつらい」¹としての屏風絵のテーマに、合戦が選ばれたのだと思います。

後三年合戦絵巻では、舌を抜かれて木に吊り下げられた男の下に生首がころがる凄惨なシーンが有名ですが、全体は華麗な王朝絵巻であり、源義家が武士の統領となる物語です。足利尊氏が幕府を開き「ご先祖様は偉かったんだゾ。」と示すためのものでした。



河村たかし市長が7年前に「ホンモノの天守を作る。」と言い出したので、私は建築家として「危険な木造天守のレプリカは違法建築であり、作れません。」と説明し、「史跡とは「春高樓の花の宴」と人間の栄枯盛衰の跡をしのぶものであり、レプリカを史跡の上に作り、テーマパークとして楽しむものではありません。」と話すのですが、なにせ「史跡を観光に生かせ」と国、文化庁が推進しているので、私の声は広がりません。

私は、桶狭間の合戦場を、旗指物を押し立てプラスチック製の大型を着て練り歩くのも、人それぞれの歴史の楽しみ方であり否定しません。参加はしませんが、義元が打たれた場所が二つあるのも、合戦がどこどのように行われていたかという文系学者の研究による地誌の力の成果ですので尊重します。しかし、古文書から歴史の実相に迫ろうとする歴史学者なら、「わからない。」が答えです。

安土城の「復元的研究」は、大工の残した図面と信長公記とを、現地測量をして組み上げた一種の設計行為でした。建築史学の中では異色の研究です。

現存する屏風を史学として研究するのは、現存する松本城、犬山城がどのようにして作られ、使われたかの建築史学の研究と同じだと思います。これら秀吉の時代に作られた城は作られた経緯を示す古文書が残されてなく、屏風より建築の方が残存しているグッズの情報は圧倒的に多いですが、答えは「わからない。」です。建築スタイルから最古の



天守と言われていた丸岡城は、2019年に年輪年代調査によって、建設年代が天正から寛永にあっさり下がってしまいました。木材は確かにそうなのでしょう。しかし、野面積の石垣、望楼型天守のスタイル、石の瓦など、天正の雰囲気をも十分に漂わせています。天正の天守そっくりに、石は流用して、寛永に建て直されたという古文書が出てくれば解決するのですが、「わからない。」です。

内藤先生は「建築史学でなく、京大の三辰を目指す。歴史学として認められるようにするのだ。」と研究室で言っておられました。私には辰とは林屋辰三郎しか思い浮かべられません。建築史学ではブツへのこだわりだけが普通であり、内藤先生のように歴史感を語る事は少ないです。17世紀、18世紀の屏風においての歴史学となれば、江戸時代前期の「人の営み」を、前の戦国・安土桃山と、後の江戸時代の概観と合わせ、学者としての歴史感を示さないとはいけません。

私のような素人に好まれる歴史となると、安土桃山時代から江戸時代をすっ飛ばして明治になってしまいますが、武家の〈武〉への思いが込められた三本の戦国合戦図屏風研究により、江戸前期の風俗図屏風の一隅から離陸することを期待しています。

ブルーノタウトが指摘したように、桂離宮と東照宮は共に江戸初期の建築ですが、デザインは対極にあります。内藤先生はこのどちらにも生んだ安土桃山のデザイン感覚を他の事例をあげて学生に探るのでした。一つはマネリスムであり、もう一つは「奇想の系譜1970年辻 惟雄」でした。先生の安土城天守の芸術論・宗教論「天道思想」には、学生のコメントが先生によって昇華されて入っています。(笑)

建築家である私の血となっているデザインソースは、桂離宮から数寄屋に発展した和風住宅です。生まれ育った環境が私の感性を育てており、材料が木材から鉄とガラスに替わっても変わりません。奇想の風俗図は、東照宮から京都の揚屋「角屋」、明治の擬洋風建築と繋がるデザインの系譜にあるものだと思いますが、私は知識として持っているだけであり、私のデザインには使いません。

三浦正幸広島大学教授が「城のつくり方図典」を2005年に小学館から出し、「新たに安土城天守を復元」とあるので、私は内藤先生に「いいんですか？」と聞いたところ「ほっておけばよい。残る本が残るのだ。」でした。

しかし、2012年に先生がお亡くなりになると、三浦教授は、NHKの番組で「内藤昌を超えた。」と先生の顔写真を出して内藤案を否定、自説を唱え、名古屋城天守閣で企画展をしたのです。弟子を自認する私は、友人二人に抗議の相談をしたのですが、二人は大学に籍をまだ置いているので、名古屋城総合事務所、出版社への抗議文は個人事務所を開いている私が書くことになりました。友人から先生の本のリストを貰い、60歳になって、内藤先生の本を改めて読み通しました。

1976年に内藤先生は国華に「安土城研究」を発表したのですが、翌年の国華に故・宮上茂隆氏が安土城の宮上案を発表しました。「大工の残した図面は、信長公記から大工が想像して書いたものだ」と始め、内藤案に幾つもの異を唱えました。従来からされて



いた安土城の復元と同様に、「信長公記」と史跡測量図からだけで宮上氏は復元案を作りました。宮上案は、映画「火天の城」に結実します。

三浦氏は宮上氏の弟子筋にあたります。宮上氏と同じく大工の残した図面を大工の創作とし、「信長公記」と史跡測量図からだけで復元した2005年の三浦案が、2020年度NHK大河ドラマ「麒麟が来る。」に新たなCGに衣替えして出ると三浦氏自身がNHKの歴史番組で語り、大学を退職した友人二人と私はまたまた忙しい事になりました。半世紀の前の事ですので、今のNHKには「内藤昌による安土城復元の特別番組」を制作した記憶はありません。結果、NHKは安土城天守を内藤案で流しました。

合戦マニア・城マニアは基本的には歴史学の味方なのですが、対応の仕方によっては、学者にとって手ごわい相手となります。

批判の二 考古学は妄想の学問でよいが、古文書があり遺構の残る時代で妄想はダメ。

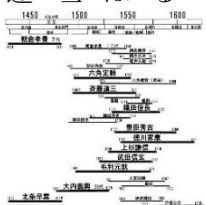
「妄想」と書くと、考古学をバカにしたように取られるでしょうが、違います。「騎馬民族がやって来た。」のヤリトリに羨ましさを感じての事です。文字の無い時代、古墳の副葬品に馬具が一気に増えた事から、学者の間で堂々と議論できるのですから、古文書による資料主義の歴史学から見てのイイナアです。この議論は聞いていて楽しいです。著名な考古学者が、東北地方で自治体を喜ばせようと多くの縄文遺跡を創り出して以来、考古学はわずかなブツの発掘だけで論を張る「妄想」の学問だと言われていますが、残念なことだと思っています。考古学は妄想すべき学問です。

しかし、今、大学で考古学を専攻して仕事につくのは地方自治体です。都市開発に伴う遺跡の発見で、史跡が壊される前の調査員の需要が高まっています。妄想などする間もなく、地道な作業を行っています。

ただし、「信長の城」となると、市長の観光への期待に応える為に、市民から発掘費用の了解を得るために、オカシナ方向に行っています。小牧市と岐阜市です。残っているのは石しかないので、考古学者が石垣を論じています。小牧山城史跡情報館には原寸の石垣模型があり、石垣の作り方を説明しているのですが模型の石の形が綺麗に整形されているのです。すぐ外に石垣の実物があるのに、どうして形に無関心なのでしょう。小牧山も金華山も固いチャート山であり、信長はその地山から石を割り出しているのです。小さく尖った形状の石でしか石垣に積めませんでした。小牧城の石垣は、地山の石を石垣の間にそのまま残し2〜3段でしかありません。

1559年、信長は尾張下四郡を治めたところまで京に上って義輝に謁見するのですが、鈴鹿の山越えをしています。当然、六角氏の石垣に覆われた観音寺山城を見あげていると思うのですが、信長公記、武功夜話に書かれていないので話題になりません。信長は遅れて現れた戦国大名ですので、六角、朝倉、浅井、日吉大社に既にあつた先進の石垣を見聞していたのでしようが、石工を近江から呼び、加工しやすい花崗岩、安山岩を遠くから運ばせる力をまだ持っていなかったのです。

石垣技術の比較研究より「信長の城」のアピールが考古学調査員に重要なのでしよう。岐阜市では「濃姫が見たかもしれない滝のある庭」というのもありました。チャートの



山に水をどうやって引くのでしょうか？ 著者の「濃姫の呼称」研究を読むに、子をなさなかったためにか、濃姫の名前もその姿もつかめておらず、映画、テレビのお話が真実のようになっていきます。教育委員会に所属する考古学者は行政の長の意向「観光」に従っていて、古文書があり他所には似た事例が今も残る、この時代に合わせての考古学を学問として構築していません。「読み屋」「堀屋」と別れ、互いに歩み寄りません。小牧山は、「神君家康公の陣跡」として江戸時代保護されてきたのですが、小牧長久手合戦の為に築かれた堀、土手の遺構は忘れ去られています。

極め付きは、「城郭考古学」を標榜する千田嘉博奈良大学教授です。宮上先生、内藤先生の論文を食い散らし、タレントとして活躍するのはご自由ですが、内藤論文を自分に都合よく間違って引用されると、先生の弟子として無視もできず、NHKと出版社に読書感想文（内容は抗議文）を送っています。

前にも書きました、2016年8月6日の徳川美術館での富永商太復原画伯と共に行った千田氏の講演会の続きです。「江戸始図」の本を読みましたが、書いているのは千田氏でなく共著の森岡氏であり、慶長江戸図との比較からの「新たな真実」はなく、内藤先生のいう「残らない本」です。また、イラストレーター富永氏が「外壁が黒か白か迷ったが、白にした。」と言われたので、「そんなので復原というのかよ。」とよほど手を挙げて追及しようかと思ったのですが、原史彦学芸員のプロデュースであり、原氏の顔を講演会の場で潰していけないとちよっと大人の気分になってやめました。

300年前、合戦図屏風を制作した時の「絵の注文者、絵師、鑑賞者が共有した絵解き物語」の現代版が続けます。シナリオを語った軍学者神谷存心は宮上茂隆氏となります。

その後、千田氏の情熱は燃え上がり、2020年、NHKブラタモリでは姫路城において「江戸城はこのように白かった。」とタモリに解説し、NHK知恵泉でも「私が慶長江戸城天守を復原した」と発言されました。

これはNHKだけには訂正しておかないと、大河ドラマ「麒麟が来る。」での安土城天守のこともあるので調べました。

2018年6月には雑誌サライ・ムックに江戸城天守4代の復原イラストを載せ「家康、秀忠2代の江戸城は白かった」と、宮上先生の1990年の論文「慶長見聞集…白蠟の瓦であった」をつまみ食いして解説をしていました。

宮上先生は大工・中井家に残っていた指図・元和の江戸城天守を慶長の江戸城天守と間違えていた事がその後判明しており、内藤先生は新たに発見された黒い天守の「江戸図屏風」を元和の江戸城天守であると都市景観から断定しています。

私は、内藤先生の慶長、元和、寛永の江戸城天守の記述を集めて、屏風絵と共にNHKと雑誌サライ・ムックに送りました。残念ながら、雑誌サライ・ムックは意に介さなかったようで、同じイラストを使い、また「江戸城」の特集を組んでいます。

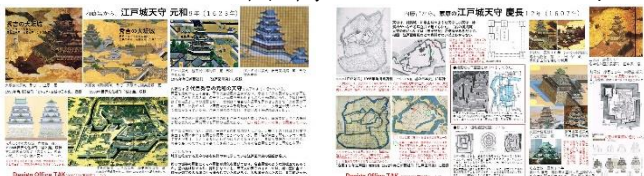


表3 覇者の天守と徳川家3代の天守比較表

		覇者が住まう城			江戸を守る為の城				
		① 安土城天主 天正3年(1575年)	② 豊臣期大坂城天守 天正13年(1585年)	③ 慶長期江戸城天守 慶長12年(1607年)	④ 慶府城天守(初期) 慶長12年(1607年)	⑤ 慶府城天守(后期) 慶長13年(1608年)	⑥ 元和期江戸城天守 元和9年(1623年)	⑦ 寛永期江戸城天守 寛永15年(1638年)	
徳川	絵図			?					
	様式	前期層塔型	後期層塔型	—	後期層塔型	後期層塔型	後期層塔型	後期層塔型	
	建物高さ	107尺	111尺	106.25尺	98.50尺	98.50尺	118尺	104尺	
	1階幅員	27尺×24尺	30尺×30尺	32尺×32尺	30尺×30尺	30尺×30尺	32尺×32尺	20.8尺×21.8尺	
	階数	7階	7階	5階	6階	6階	5階	5階	
	最上層窓	5/5窓(1射1窓)	5/5窓(1射1窓)	白欄式(慶長見聞録)	4/4窓	4/4窓	4/4窓	4/4窓	
	欄干形状	有	有	—	有	有	有	有	
	下階幅員	27尺×24尺	30尺×30尺	白欄式(慶長見聞録)	4/4窓	白欄式(慶長見聞録)	4/4窓	4/4窓	
	外壁	上	瓦葺 石壁	瓦葺 石壁	—	瓦葺 石壁	瓦葺 石壁	大壁 石壁	大壁 石壁
		下	瓦葺 土壁	瓦葺 土壁	—	瓦葺 土壁	瓦葺 土壁	大壁 土壁	大壁 土壁
備考									
徳川			② 豊臣期大坂城西ノ丸天守 慶長15年(1609年)	③ 二条城天守(初期) 慶長11年(1606年)	④ 伏見城(西側) 慶長11年(1606年)	⑤ 慶長度御所城天守 慶長14年(1609年)	⑥ 元和期城天守 慶長17年(1612年)	⑦ 徳川期大坂城天守 寛永3年(1626年)	
	絵図								
	様式	後期層塔型	後期層塔型	後期層塔型	後期層塔型	後期層塔型	後期層塔型		
	建物高さ				180.54尺	118尺	144.5尺		
	階数	4階	5階	5階	5階	5階	5階		
	最上層窓	5/5窓	5/5窓	5/5窓	4/4窓	4/4窓	4/4窓		
	欄干形状	有	有	有	有	有	有		
	下階幅員	27尺×24尺	30尺×30尺	30尺×30尺	30尺×30尺	32尺×32尺	32尺×32尺		
	外壁	上	大壁 石壁	瓦葺 石壁	瓦葺 石壁	大壁 石壁	大壁 石壁	大壁 石壁	
		下	大壁 土壁(土)	瓦葺 石壁	瓦葺 土壁	大壁 土壁	大壁 土壁	大壁 土壁	
備考									

慶長の江戸城天守の新資料は見つかっていませんが、友人の満田高久氏が、その後1年かけて2021年3月にまとめた論考A4版60枚、資料編29枚の結論は「覇者の天守は黒かった。」です。左にまとめの一枚を載せます。

この「合戦図―描かれた〔武〕」では、「戦国合戦絵巻…東照社縁起絵巻」と目次に打たれていますが、徳川家康の一代記を天海がまとめ、詞書は上皇、親王、門跡が筆を執り、狩野探幽が絵をかき、東照宮に奉納されたもので名前は「東照大権現（家康のこと）縁起」です。7番目の駿府城天守の絵は、この縁起から取って来ています。

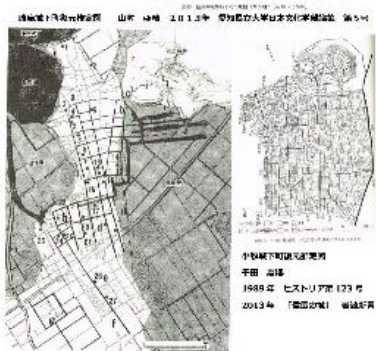
この本は、絵巻物、屏風絵の絵画の史学からみると、合戦にこだわりすぎて間違った認識を購買者にあたえているのでないでしょうか。

千田嘉博奈良大学教授の小牧城下町復元もおさらいしておきましょう。1989年に、千田氏が歴史地理学の手法を使い、「織田信長は清州を捨てて小牧を尾張の首都とすべく城下町を作った」と発表された時は、私も胸が高鳴りました。この研究が引き金となって小牧市は発掘をはじめました。

天保12年の小牧の古地図



わずかな茶碗の欠片と街区の中央に「背割り側溝」が発掘されましたが、武家屋敷も町人地も発掘されませんでした。信長は小牧には4年しか出城を構えていません。染め物屋の跡が発掘されても、信長が岐阜に移った後、70年の間は村落があったのですから、染め物屋の跡だけで城下町が作られたとは言えません。愛知県立大学歴史地理学の山村亜希教授は「街道の取り入れ方が城下町には見えない。」とだけで、正面からの千田案の批判はしませんでした。その頃山村氏は岐阜の城下町の復元をしていましたので取り出して並べました。信長の城下町である岐阜、安土と比べて千田氏の小牧城下町復元案は異様に大きいです。それぞれの時期の信長の力を考えればこの大きさはありえませんが、千田氏は天保12年の地誌を根拠にしていたのでした。著者の「古地図を基に合戦屏風図が描かれた。」への私からの諫めの古地図です。



第3図 安土城下町復元図
城下町復元機七組 土木 社 松岡 豊 2008年「織田山崎下町」研究会
原田 肇 監「織田安土と小牧城下町」

安土城でも、近江国蒲生郡安土古図、総見寺絵図がありますが、信長公記を意識した地誌図であり、当時の人々がどう思っていたかがわかるだけで、歴史の実相にせまる資料とはなりません。さらなる文系学者の活躍を期待するところです。

犬山への街道は、今の名鉄小牧駅の方に移動してしまい、寺も神社もないのでは、山村氏も古文書の得ようもありません。これが真実だと反証できない以上、学者世界も大きな声で言ったもん勝ちのようです。本の出版、テレビ出演が千田氏には大切です。河村市長と大変似ています。

千田氏は2013年に「信長の城」を岩波新書から出すのですが、「背割り側溝こそ、城下町の証拠である」と意気軒高です。「背割り側溝」は、均田制の田んぼでも、畑でも水を引くためにありました。信長公記に守護所の移転と書かれていない以上、従来説の「小牧山は出城であり、女、子供、商人は清洲にいた」事を発掘結果によって確認できたということだと思います。

信長が岐阜城から安土城に移っても、清洲に家族を置いたままの単身赴任者がいたので、すから、守護所としての街並みをもつ清洲の町が人々に心地良いのは当然でしょう。千田氏は発掘結果から自説を訂正するチャンスがあったのですが、そこは「信長の城」という自治体の観光政策も働いたのか？ しませんでした。

批判の三 フィジカルであれ、歴史地理学に期待する。

「フィジカルであれ」は、内藤先生の口癖でした。工学部建築学科ですので、数字で実証的に語らないと工学の範疇におれません。それでいて「建築史学でなく、歴史学を極めたい。」となるので、研究室の下働きは大変です。私の「近世城下町・町人地」の卒論は100の城下町を数字で表す事であり大変な作業を伴ったのですが、先生はその本「日本 町の風景学」の中でわずか3行でしか示されていません。

「中世以来、手工業の産業が発達した近畿を中心とする町と開発度の少ない東北地方の町とでは、その町通りの長さの単位に大きな差があった。畿内はますます小さくなり一丁が京間40間(79m)ほどになるに對し、東山道では逆に大きく80間(158m)」

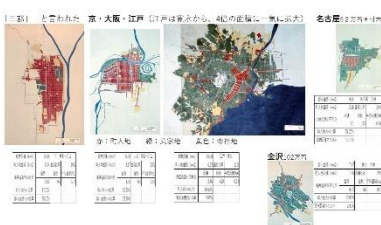
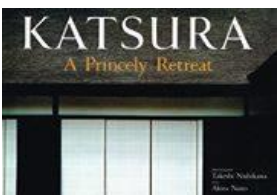
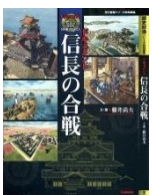
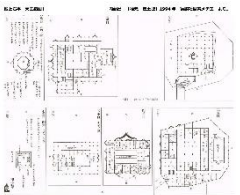
先生は未開拓の江戸時代の建築史を極めたく、「桂離宮」「角屋」の研究もしていたのですが、1969年37歳の時に木割書の研究の為に静嘉堂文庫で加賀藩大工の古文書の中から「天守指図」を偶然見つけ、1976年44歳の時に「安土城の研究」を国華に発表します。すると、建築の専門家だけでなく、歴史マニアの嵐に巻き込まれ、「お城の専門家」のように扱われて困惑します。

「城の日本史」1979年はその嵐に向けて書かれたものでした。あとがきに先生は「全国に城のマニアは数多く、城に関する物はうんざりするほど出版されているが、大半は戦前の軍国主義の時代に研究されたものの翻案であり、いわゆる軍記物・通説が興味本位な伝説を交えてまかり通っている。論述は体系的でなく、趣味性に溺れている。」と書いています。城の研究の後進性を指摘し、自らの案がそれら歴史マニア向けに使われる事を嫌い、無断掲載を禁じ、近世都市として城を捉える事を望んでいました。

晩年には「ほっておけ、残る本が残る。」と自信を持っていたのですが、合戦マニア、城マニアは、映画、テレビから、雑誌、ゲームに移行して今も増え続けており、安土城の内藤案がそれらに出る事はないので先生の思いは伝わらず、名古屋城天守木造化事業のような事がおきています。私は行きがかり上、先生の思いを残そうと努めており、軍記物・通説を学問として取り組まれている文系学者に対して、期待を込めてこの読書感想文を書いています。

建築の絵、図面にフィジカルを求めた歴史を書いていきます。

大工、建築家は、ブツとしての建築が最終品なので、図面をあえて残すことはないです。日本の古建築は平面図だけで示されてきました。「間面法」と呼ばれ、正面からみでの建物の幅は例えば「五間」と柱の間の数が5つあると表し、「四面」と四周に庇が取り付くことだけです。平屋建てですので「五間四面」とだけ済まされてきました。マルポチの平面図があれば、架構の姿は大工の頭にあり、必要な材木の石高は算出されたのでした。



五重の塔とか、二重の大建築は、断面の検討に雛形といわれる模型を作っています。軒ぞり・破風は、現場で原寸模型を作成し建物にあててみて確認します。安土城天守は七重であり、各階平面図が残されましたが、断面図、立面図はなく、平面図への書込みだけですまされています。

実際の工事では、10分の1の雛形（模型）が作られていたのだと思います。大工・岡部又右エ門の下に京都、奈良の宮大工が集まり、左官が土壁を塗り、瓦を焼き、漆を塗り、金工細工をし、襖絵を描くのです。何百人が同時に効率よく働くには、現代の図面に替わる模型が必要です。

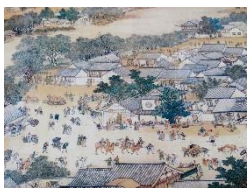
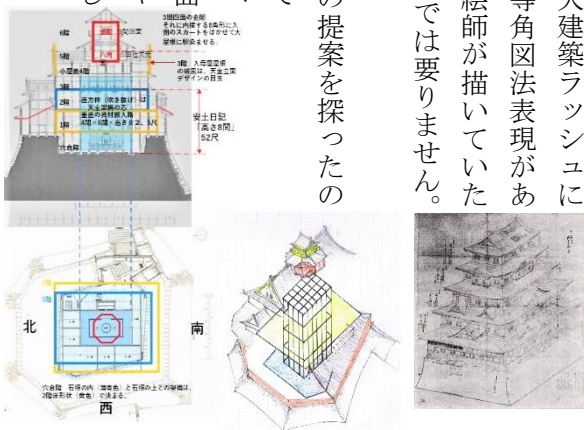
矩計図（断面詳細図）が出てくるのは、室町末からです。桃山時代の大建築ラッシュに合わせて工夫されたでしょう。甲良家の家伝書では、江戸城天守の等角図法表現があります。大工が役人化して木割書（標準設計図）をまとめるとなり、絵師が描いていた等角図法を取り入れたでしょう。等角図法は大工、建築家の設計作業では要りません。

私は、内藤先生のなんでも「信長」が主語の論文に反発して「大工」の提案を探ったのですが、安土城天守の架構を私が考える手段は、平面図と断面図だけです。10年ぐらい習得に時間がかかりますが、二次元の平面図、断面図、立面図でもって、頭の中に立体を浮かべられる訓練をしています。図面の中に仮に立つと、その地点毎に透視図が浮かびます。まさにバーチャルリアリティの世界です。しかし、素人の方に空間全体を一枚で理解してもらおうには等角図法が便利です。

著者は「中国の清明上河図などから学んだかもしれないが」と推測をしていますが、同じ12世紀に日本では、伴大納言絵巻で絵師が門を等角図法で正しく描いています。絵師は実物を見て正確にスケッチをし、絵巻物としては柱・梁が太く重い感じになるので、細く表現したのだと思います。年中行事絵巻でも、元信の洛中洛外図に繋がる等角図法が見てとれます。等角図法は、源氏物語絵巻のインテリア表現で有名ですが、建築の外観も同じ図法を使っています。中国の清明上河図より日本の方が精緻でしょう。

新たに入って来る建築に素人のキヤドオペレーターは、平面図は書いてもなかなか断面図が書けません。教育に苦労しました。絵師も同じであり、まずは四角い平面図を描き、それを斜めから見たひし形にして、高さ方向の絵を足したのでしょう。高さ方向もひし形になりますが、X, Y, Zの軸がとれますので、定規で補助線を引けば、絵師でもオペレーターでも3次元空間が簡単に描けます。

日本画の表現に鳥観図は昔からあり、近くが大きく、遠くが小さいというルールだけでなく、空気を描いています。雪舟の水墨画から墨の濃淡を積極的に使っています。面相筆で輪郭を描き絵の具で塗りつぶすやまと絵は装飾的ですが、平板であり装迫力に欠けます。新たに入って来た漢画が変えました。狩野永徳に結実します。



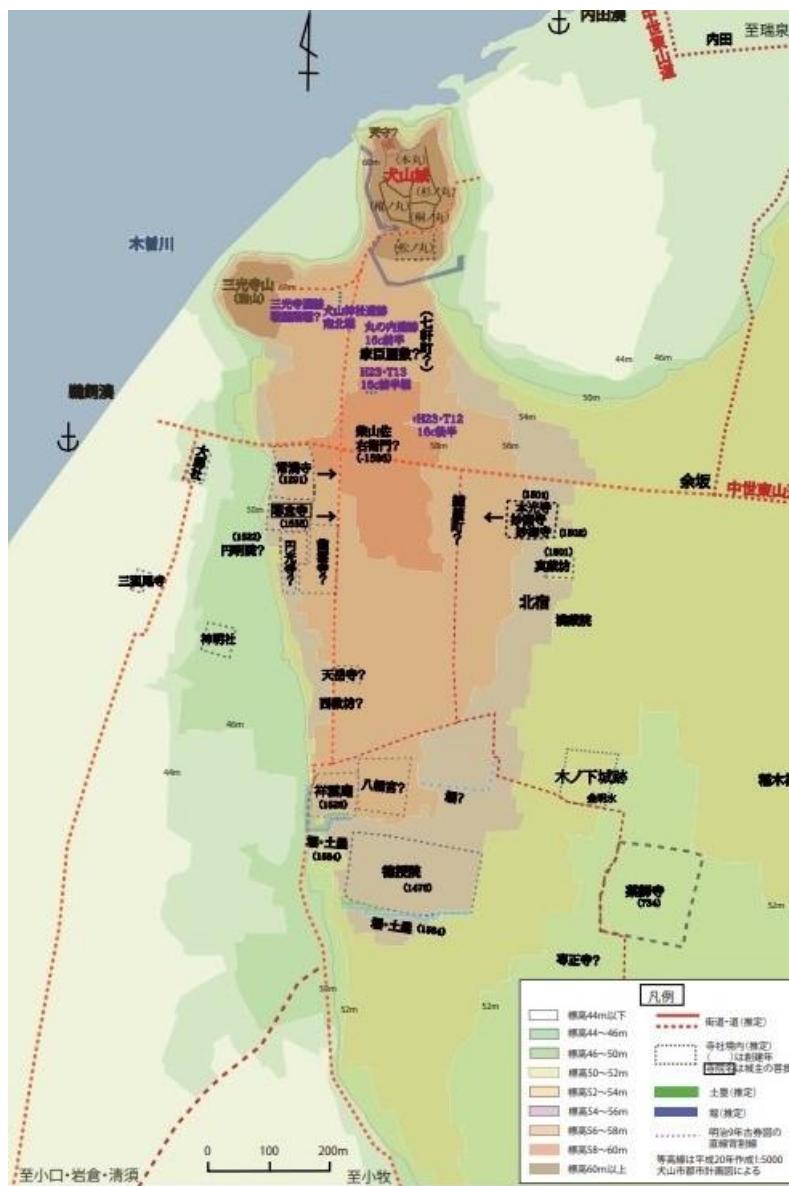


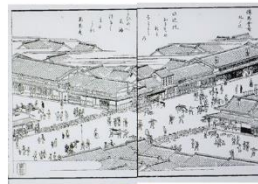
図1 戦国期（1537年頃～1590年）の犬山城下町

No.	名称	所在地
1	本丸	犬山城
2	二ノ丸	犬山城
3	三ノ丸	犬山城
4	四ノ丸	犬山城
5	五ノ丸	犬山城
6	六ノ丸	犬山城
7	七ノ丸	犬山城
8	八ノ丸	犬山城
9	九ノ丸	犬山城
10	十ノ丸	犬山城

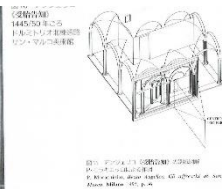
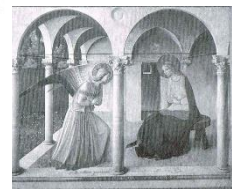
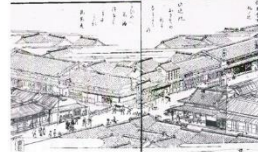
歴史地理学に期待します。都市史の学徒を任じてきた私ですが、歴史地理学と言う学問分野があるのを知ったのは10年前です。歴史景観をフィジカルに再現しようとする手法に驚きました。山村亜紀氏は、愛知県立大学から京都大学に行かれてしまいましたでしたが、熱田、津島、岐阜、犬山と幾つもの町について論文を残されています。残念ながら、合戦場はありません。

名所図会は京都から始まり、尾張でも作られました。名所案内が歌と共に書かれています。史跡とはそういうものですが、史跡の上に往時の姿を復元して遊ぼう、と国が言い出しました。短歌という情緒性に満ちた教養を磨く事より、確かに史跡の上で遊ぶ写真をインスタグラムで共有する法がお手軽です。300年前も、長い軍記を読むより合戦図屏風一枚でお手軽に済ませたのではないのでしょうか。尾張名所図会も等角図法ですが、図法通りに描くと道行く人が見えません。名古屋城下町の道幅は広かった、と誤解しないようにしているのであり、真実とは違います。

●尾張名所図会の道路幅は誇張し、広げている。



中心の本町通りでも幅は3間=6m
等角図法で正しく描くと
幅は3間=6m
↓
等角図法で正しく描くと
幅は3間=6m
↓
等角図法で正しく描くと
幅は3間=6m
↓
等角図法で正しく描くと
幅は3間=6m



透視図法はルネサンスに生まれました。受胎告知の背景の建物はどここの地点から見たのか正確にだせません。日本に入ってくるのは、伊藤若冲が奇想の絵を描いていた頃であり、司馬江漢（1747-1818）の絵が残っています。透視図より、胡麻油で油絵の具もどきを作り、絵に陰影をつけた事が画期的でした。現在のアニメでも、デイズニーは3次元に陰影をつけていますが、日本のアニメは平板な漫画の延長ですので、日本人は光を操るのが苦手の国民のようです。私はカラバッジョから光を学びました。

小学校の教科書に、「平城京」関野貞・復元とあつたのを覚えていましょうか。明治43年にまとめられた彼の大要に、世論が沸き立ち、当時田畑であつた土地が収容され、「発掘」が行われ、1300年前の都が実証されました。70年で都は捨て去られ田畑になつていたことが、かえつて遺跡の保護になつており、復元に幸いしたのでした。

一方、「平安京」は、現在に至るまで都市であり続けているので、遺跡の破壊が進み、「発掘」の成果は部分的にならざるを得ませんし、何層にも重なつた遺跡から、その年代を特定することが難しいです。

「歴史地理学」の方法は今も「平城京」関野貞・復元と基本は変わりません。私が理解した手法を箇条書きにします。

- ①まずは地表面をよく観察する事です。都市はその時代の地勢に基づき作られています。その時代の地勢をまず、復元します。今は航空写真なども使い、地表面のわずかな高低差も読みとります。
- ②明治の地図をもとに、字（あざ）の名を引つ張り出します。地名と言うのは昔のまま残っていることが多かったのです。今はダメですので、明治初期の地図を探します。
- ③明治の中ごろ、税金の算出の為に宅地割図が作られていますので、それで道路に対しての宅地の方向が読みとれます。建築物はすぐに変つてしまいますが、都が田畑になつても道路の跡は残つていて、1300年もの間、土地の権利の継承は道路に沿つて行われていたのです。
- ④江戸時代の古絵図を参考にします。平板測量技術がオランダから伝わり、絵図でなく地図として見る事が可能なところもあります。ただし、江戸時代の学者がこうであつたらうという記事は、あくまで参考とします。江戸時代の学問には、当然限界があります。
- ⑤中世になると、神社・寺が多く建てられており、その古文書が残っていますので古文書を時代特定の鍵とします。発掘では陶磁器を使つての年代推定もしていますが、50年単位になり精度が悪いです。

⑥机上の理念によつて都市は作られているので、その理念を研究します。都は中国から輸入された律令制度に基づいてあり、生産の基本である田圃の条里制と都の都市計画である条坊制は同時に考えられていました。

以上、6つの手法から「歴史地理学」とは「推定」の学問であるといえます。学問としては、都市の形というフィジカルなものを追っかけているのですが、その方法からフィジカルに成りえない宿命をもつた学問なのです。そこに「考古学」からの検証を加えて、初めてフィジカルな形が明らかになります。

歴史地理学「読み屋」と考古学「堀屋」はセットでないと近世都市研究はすすまないので、いかんせん学問の個性が違つており、仲が悪いように感じていきます。「読み屋」は古文書を読み解く「歴史学」の知識が優先しますが、「堀屋」はお金を使つての発掘事業を成り立たせないといけないので、「発掘成果」を急いで求めます。そのせいか、発掘結果から逆に古文書をじっくり読み説く事は苦手のようです。

批判の四 学者の研究対象が、狭い範囲に限定されている事への批判。

建築家となると、先生でもないのに、小学校を設計し、病院も設計します。住宅、工場、商業施設と、どんな建物用途にも迷うことはないです。納骨堂、火葬場は、今やトレンドの建物です。絵師が絵を描く技術をもつように建築技術をもち、絵師のように芸術家としての個性を看板として持たないといけないですが、「いかほども注文主の要望に応えます。」でないと、仕事になりません。コツはなにかというと、人の持つ感性、能力に敏感であり、設計対象の組織社会の特性を素早くつかむことです。日本は法治国家です。建物用途ごとに法律があり、法をまずチェックするのですが、建物用途の組織社会がけっこう法文となっています。今はネット社会となり調べものには困らなくなりました。

こうして感想文を書くにも、この10年、生活環境コンサルタントとして、フェイスブックに書き溜めたものがあり、コピー&ペーストで済みますことができます。「雨漏り」「キッチン」「結露」「断捨離」と生活感溢れる注文がおおいのですが、河村たかし市長、三浦氏、千田氏のおかげで、お城ネタも随分溜まりました。

そんな私の目から見ると、学者は狭い世界で生きているように見えます。自ら狭くしているようにも見えます。顔見知りの学者同士で語り、専門領域を出ない事がエライと思っている節があります。ですので、「城郭考古学」などと学問領域を曖昧にして、アチコチの論文を読み飛ばして「新説」だと言いまくる方が、マスコミには重宝がられます。「城」とつけばなんでも千田氏は応じてくれます。

名古屋市天守木造化事業の反対運動をしていて、役人のタテ割り組織の対応に嫌になっていますが、学者は個人事業のほうですが、役人のタテ割り組織のようなものを感じます。ですので、原史彦氏が「こちらの屏風が元であり、犬山の屏風はその写し。」と論文にされるのも理解できます。書誌学と同様に絵画でも、描法、画材、紙の検討をすれば、祖本か写しかはわかるものだと思うのですが、そうすると分野の違う学者が集まる必要があります。国立博物館ならスタッフもいまいしょうが、名古屋では難しいのでしょうか。

名古屋博物館のホームページにある「築城図屏風」の説明ですが、
「この屏風は、建築中の城の構造や芝居小屋、町並みの様子から慶長中頃の様子を描いたものである。慶長12年（1607）築城の第一期駿府城とする説が有力であるが、駿府城の縄張り（建物配置）と一致せず、名古屋城・金沢城をあげる説もある。近世初期風俗画の中でも他に類例のない異色の画題であり、芸能・風俗史の観点からも興味深い。」とあります。

名古屋市は、この屏風を名古屋城と思いこんで購入したのですが、内藤先生は慶長の駿府城であると、「建築中の城の構造や芝居小屋、町並みの様子から」考察し、駿府城天守の復元までされています。なぜ、「駿府城説が有力であり」「金沢城をあげる説もある」となるのでしょうか。金沢に5層の天守があったという説を私は見たことありません。名古屋博物館では、学芸員が役人になっていると感じました。



私は名古屋市博物館の学芸員の構成を知りませんが、専門領域を出ない学芸員ばかりなのでしょう。駿府城の学術調査研究報告書は、平成2年に静岡市教育委員会の名で出版されており、内藤昌の名はあとがきに報告書作成の代表としてあります。学芸員は200ページに及ぶ内藤先生のこの論文をはたして読まれているのでしょうか。

先生の復元案は狩野探幽のスケッチ力に頼っており、大工・中井家の図面は1階だけしかないので、弟子であっても、もろ手を挙げて復元案には賛同はできませんが、建物配置と建築のポリュームは「築城図屏風」と一致しています。

名古屋市は名古屋城調査研究センターを立ち上げ、歴史学者の服部英雄氏を所長に迎え、研究紀要も出すようになりましたが、所長は「天守は大砲を打つための台として使うのだ。」「ホンモノの木造天守に早くしたい。」と公言し、城マニアである事を隠していません。大砲をどのようにして持ち上げるのでしょうか。木造天守のあの階段では、健常者であっても登るは大変です。企画展は広告代理店だよりで、夏の企画はスターウォーズでした。子供が集まればなんでも良いというのでなく、名古屋城が市民の誇りとなるような、城（都市）の企画展をしていただきたいものです。

天守は都市のシンボルとして江戸時代からあり、昭和34年に現天守を復元した故・城戸久先生は「外観はソックリに復元するが、もともと天守の内部には誰も入っていない。内部は博物館と展望台でよいではないか。現代の法に従うにはコンクリート造でしかない。」と話されていました。

コンクリート造である大阪城天守閣博物館の館長さんも役人なのですが、「城」とつければなんでも応じ、2ヶ月毎の企画展を4人の学芸員で行い、説話の本も出されています。

「復元安土城」のあとがきに、内藤先生の感謝の言葉が定型文であるのですが、その学問領域の広さに驚きます。歴史学、考古学、古文書学、書誌学、美術史学、思想史学、宗教史学、経済史学、技術史学、都市史学、建築史学とならんでいます。本を読めば、それぞれの学問領域の専門学者に先生が自らあたった事がわかります。確かに先生は凄すぎますが、名古屋市博物館、名古屋城調査研究センターは、あまりにも貧しいです。

第七章 天の啓示を生かす努力が研究となる。発表が難しい。

このタイトルは、内藤先生が私たち学部生3人の送別会で言われた言葉です。著者の探検モノのような論考の展開にこの言葉を思い出しました。

「天の啓示」とは、「天守指図の発見」という偶然がなければ「安土城研究」を先生がする事もなかったという事です。先生は37歳の偶然を生かすため、本を出す44歳まで7年間努力を続けました。私たちが就職しても、研究と同じようにチャンスを生かして努力しないさいです。努力しなくては良い仕事にならないのは、実際そうでした。「発表が難しい」とは、9000円の国華を手にして「発表の場」を得ることが難しいと理解

駿府城学術調査研究報告書

平成2年3月 印刷発行
発行：静岡市教育委員会
印刷：八景印刷株式会社
著作：文化環境計画研究所 ©
名古屋市長代官町35-16
第一室ビル
TEL: 052-932-5178
FAX: 052-932-5187

していたのですが、一昨年「江戸城は黒かった。」の証明の為に先生の江戸城に関する論文を基に、近世絵画史からの屏風と絵巻物の研究・解説書を図書館で読んだのですが、「研究」と「発表」は違うものだという事も「発表が難しい」に含まれていたのだと、いまさらながら思いました。

先生は江戸城を一つにまとめた本を発表していません。「慶長期江戸城」の資料が少ないので「江戸」の都市論は本で語れても、天守となると、元和と寛永の二つの天守を発表の場に合わせて請われるままに書くしかなかったのです。

「慶長期江戸城」を推定するには、安土城が燃えてからわずか3年で作られた「秀吉の大坂城」それに続く伏見城、二条城の研究がいります。「秀吉の大坂城」では、大工・中井家に残された配置図兼1階平面図を元に内藤先生が大学院生にやらせた大坂城天守の研究・復元図を採りだしたのですが、確かにこれでは内藤先生の名で発表できないと思います。大坂城では「天の啓示」がなかったため、先生も努力できませんでした。

内藤先生が屏風製作にも関わっていた事を知る人は少ないです。1976年国華に発表して10年後、堺屋太一プロデュースにより、1992年セビリア万博に安土城の上層2階分を原寸で復原し、出展することになりました。5階の信長が座る畳の後ろに屏風が置かれていました。原寸模型は、安土の「信長の館」で今も見られますが、平山郁夫氏画の釈迦説法図が見えないので、屏風は置かれていません。高麗縁畳は記録にあります。

障壁画のテーマは「信長公記」「天守指図」にあり、平井良直氏の研究に従って画題を決めて、平山氏の他、福井爽人氏、岩井弘氏、京都市立芸術大学グループによって描かれています。万博という発表の場に合せて、先生はさらに「しつらい」を設けたのです。画題は、外陣の壁に描かれた鯨と龍、天井の天人をうけて山と海の景色としています。私には蓬莱山である安土山を手前に入れて琵琶湖を望む鳥観図に見えます。

床も朱色の漆が塗られています。これも先生のデザインです。最上階6階の黒漆は記録にありますし、金閣の最上階もそうです。蓋然性が極めて高いですが、朱色の床は金閣、都久夫須麻神社、吉田社の八角円堂にありません。犬山城天守では、板の間に毛氈を敷いたという記録があり、5階6階ともに、畳でなくポルトガルから輸入した毛織物を敷いていたかもしれません。歴史学は資料を基に歴史の実相に迫るのですが、原寸模型となると資料があるわけがなく、建築家・内藤昌の面目躍如となります。

【謝辞】

最後までお読みくださりありがとうございました。私の読書感想文だったはずなのですが内藤先生を何度も登場させ、最後も建築家・内藤昌の紹介で終わってしまいました。70歳の老人が半世紀前の思い出を語っているのだと、お許しください。

高橋和生 Kazuo TAKAHASHI

デザインオフィス タック Design Office TAK

takahashi@pontak.jp

〒461-0023 名古屋市東区徳川町1301-302

tel&fax 052-508-8659

Mobile phone080-7079-4109

